

## 平成26年度 大学院4年制博士課程における自己点検・評価の内容

平成24年度開設の4年制博士課程を設置する各大学は、平成26年度は以下の点検・評価項目について、以下の要領に基づき自己点検・評価を行い、その内容を次ページ以下の様式により、9月30日までに各大学のホームページで公表するとともに、そのURLを薬学系人材養成の在り方に関する検討会へ報告してください。

### 要領

- ・作成に当たっては、平成24年度実施の自己点検・評価を基に、中間時期の状況等について自己点検・評価を行い、その結果や問題点、変更点、改善計画などを枠内に記載する。
- ・「平成24年度に行われた『大学院4年制博士課程』における研究・教育などの状況に関する自己点検・評価について」（平成24年11月8日 薬学系人材養成の在り方に関する検討会）を参照する。

### 項目

- 入学者数、在籍学生数
- 「理念とミッション」、「アドミッションポリシー、カリキュラムポリシー、ディプロマポリシー」と実際の教育との整合性
- 入学者選抜の方法
- カリキュラムの内容
  - ・ シラバス
  - ・ 教育課程等の概要（別紙様式第2号）
  - ・ 履修モデル
- 全学生の研究テーマ
- 医療機関・薬局等関連施設と連携した教育・研究内容
- 学位審査体制・修了要件
- 修了者の進路の基本的な考え方（※新規事項）

## 自己点検・評価 様式(平成26年度実施)

大学名 京都薬科大学

研究科・専攻名 薬学研究科・薬学専攻

入学定員 10 名

### ○ 入学者数、在籍学生数

※入学のコースを別に設けている大学は、コース別に記載すること。

※「旧4年制薬学部出身」は、平成17年度以前に薬学部に入学者を指す。

#### ・入学者数

平成24年度：10 名

内訳：6年制薬学部出身	<u>8</u> 名	(内社会人 <u>0</u> 名、留学生 <u>0</u> 名)
4年制薬学部出身	<u>0</u> 名	(内社会人 <u>0</u> 名、留学生 <u>0</u> 名)
旧4年制薬学部出身	<u>1</u> 名	(内社会人 <u>1</u> 名、留学生 <u>0</u> 名)
薬学部以外出身	<u>0</u> 名	(内社会人 <u>0</u> 名、留学生 <u>0</u> 名)
その他	<u>1</u> 名	(外国人)

平成25年度：8 名

内訳：6年制薬学部出身	<u>4</u> 名	(内社会人 <u>0</u> 名、留学生 <u>0</u> 名)
4年制薬学部出身	<u>0</u> 名	(内社会人 <u>0</u> 名、留学生 <u>0</u> 名)
旧4年制薬学部出身	<u>4</u> 名	(内社会人 <u>4</u> 名、留学生 <u>0</u> 名)
薬学部以外出身	<u>0</u> 名	(内社会人 <u>0</u> 名、留学生 <u>0</u> 名)
その他	<u>0</u> 名	

平成26年度：9 名

内訳：6年制薬学部出身	<u>7</u> 名	(内社会人 <u>0</u> 名、留学生 <u>0</u> 名)
4年制薬学部出身	<u>0</u> 名	(内社会人 <u>0</u> 名、留学生 <u>0</u> 名)
旧4年制薬学部出身	<u>1</u> 名	(内社会人 <u>1</u> 名、留学生 <u>0</u> 名)
薬学部以外出身	<u>0</u> 名	(内社会人 <u>0</u> 名、留学生 <u>0</u> 名)
その他	<u>1</u> 名	(外国人)

・在籍学生数（平成26年5月1日現在） 25 名

○「理念とミッション」、「アドミッションポリシー、カリキュラムポリシー、ディプロマポリシー」と実際に行われている教育との整合性

**【教育理念】**

薬学の教育および研究をさらに推進することにより、学術研究の高度化と共に、生命の尊厳を基盤とし人類の健康と福祉に貢献することを教育理念とする。

**【教育目的】**

高度な薬学の知識と研究能力を身につけ、創薬科学、分析化学、物理化学、環境科学、生化学、薬理学、薬剤学などの様々な薬学の分野で国際的に貢献出来る有為な人材を育成する。

**【アドミッションポリシー】**

本専攻は6年制学部を基礎とする博士課程であり、臨床薬学領域および様々な基礎薬学領域における高度な学識と研究能力を有した指導的な臨床薬剤師あるいは国際的に活躍できる臨床および基礎薬学研究者の養成を目指します。また、企業における医薬品開発全般を統括できる人材の養成や専門薬剤師の育成も支援します。臨床および基礎薬学領域の学問への研究志向をもちかつ知的好奇心に満ち柔軟な思考を有する創造力あふれる学生を求めます。薬学専攻の特性と社会的要請を考慮し、6年制薬学卒業者を中心に、薬剤師資格を有する24歳以上の旧4年制薬学卒業者および海外の薬学部修士修了者も対象に、国内外に人材を募ります。

**【カリキュラムポリシー】**

臨床薬学および基礎薬学研究を推進できる人材の養成を目指している。本課程は「臨床薬学コース」と「基礎薬学コース」から成っており、特論講義、総合薬学セミナーおよび薬学研究演習を通して、医療に関するより高度な薬学の知識を取得し、チーム医療の一員として活躍出来る臨床薬剤師、臨床薬学研究におけるエキスパートおよび様々な薬学の分野で高度の専門的な学識並びに研究能力を身につけ、国際的に貢献出来る研究者を養成する教育課程となっている。また、「がん薬物療法を専門とする薬学研究者養成コース」も設置しており、がん薬物療法について深い知識と臨床経験を有し、先端がん研究の発展に貢献できる薬学研究者の養成も目指している。

**【ディプロマポリシー】**

本課程のカリキュラムにより、基礎薬学あるいは臨床薬学における高度な学識と研究能力を身につけ、所定の単位を修得し、かつ独創的研究に基づく博士論文を提出し、研究科教授会が実施する最終試験に合格した学生に学位(博士(薬学))を授与する。学位授与の基準は下記のとおりである。

1. 医療に関するより高度な薬学の知識と臨床薬学研究能力(臨床薬学研究者)
2. 様々な薬学の分野で高度の専門的な学識と独創的な研究能力(基礎薬学研究者)
3. 豊かな教養と人間性および高い倫理観
4. チーム医療の一員として活躍できる臨床薬剤師能力
5. 国際的に活躍できる語学力と専門性

なお、博士の学位は、本学に博士論文を提出してその審査に合格し、かつ、博士課

程を修了した者と同等以上の学力を有することを確認した者にも授与する。

#### 自己点検・評価

本学大学院では、課題発見、問題解決型の教育に力を注ぐことにより科学、技術、人間性のバランスの取れた人材を育成し、また、学術研究を推進することにより研究者の養成と高度の専門的能力を有する人材(Pharmacist-Scientist を極めた人材)を養成し、変革する医療や製薬産業界に新たな活力となる多様な人材を供給することを目的としている。本大学院における教育を通して、臨床薬学と基礎薬学の統合を図り、総合科学としての薬学研究を推進できるものと考えている。このような本大学院の理念とミッションは、「医療の現場における臨床的な課題を対象とする研究領域を中心とした高度な専門性や優れた研究能力を有する薬剤師などの養成に重点をおいた臨床薬学・医療薬学に関する教育を行う」という4年制博士課程の主たる目的に合致するものであり、評価できる。

なお、本学は、薬学専攻博士課程とは別に、旧4年制薬学部の卒業生ならびに他学部卒業生や海外からの留学生を入学対象者とした薬科学専攻博士後期課程も設置している。しかし、“薬科学専攻博士後期課程”では、入学者は薬剤師資格を必要としないが、様々な薬学の分野で高度な知識と研究能力を身につけ、我国の将来的な創薬研究を担い、国際的に貢献出来る有為な人材育成を目的とするものであり、Pharmacist Scientist を極めた人材の育成を使命とする“薬学専攻博士課程”とは明らかに目的を異にしており、その設置については全く問題がないと思われる。

- ・ 開設年度の自己点検・評価に記載した「理念とミッション」、「アドミッションポリシー、カリキュラムポリシー、ディプロマポリシー」と、実際に行われている教育との整合性について、4年制薬学部を基礎とした博士課程の教育課程との違いを明確にしつつ、自己点検・評価を行うこと。

#### ○ 入学者選抜の方法

入学試験は一般入試と社会人入試の2通りがあり、募集人員はすべてをあわせて年度毎に10名である。これまでの研究業績および研究内容を研究科教授会メンバーで構成する面接試問会において発表、質疑を行い、可否を決定する。専攻に必要な研究能力についての面接・諮問は、卒業論文又はそれに相当する研究業績のプレゼンテーションを中心に行う。この場合、6年制学部卒業生は卒業論文について発表し、薬学部修士修了者は修士論文について発表する。社会人入学志願者(旧4年制学部卒業生および6年制学部卒業生)については、これまでの薬剤師としての研究経験(学会発表も含む)を中心に発表する。

#### 自己点検・評価

入学者選抜の実施は夏期および冬期の2回実施している。入学者は、2ページ目に示したとおりである。6年制学部卒業生および留学生は卒業論文のプレゼンテーションを中心に、また、社会人はこれまでの研究経験に関するプレゼンテーション(学会発表も含む)を中心に質疑応答も含めて各10分の面談により総合的に可否を判定した。このような選抜方法により、各志願者の臨床および基礎薬学領域の学問に対する興味、考え方、さらには将来的な展望を確認することが可能であり、4年制博士課程志願者の選抜方法として十分に評価できる。過去3年間の入学生に対する選抜方法および結果から判断して、本大学院の選抜方法は妥当であると考えられる。

## ○ カリキュラムの内容

- 1) 入学直後から特論講義、総合薬学セミナー、薬学研究演習等によりプレゼンテーション能力、討論能力等を向上させ、さらにはそれぞれの課題を進めながら博士学位論文作成により臨床薬学のエキスパートあるいは基礎薬学研究者としての自立を目指す。
- 2) 特論科目については、修了者の幅広い進路を確保するために、創薬科学系 5 科目、分析薬科学系 3 科目、生命薬科学系 7 科目、病態薬科学系 5 科目、医療薬科学系 3 科目、および薬学教育系 2 科目の計 25 科目を隔年で開講しており、様々な薬学領域における高度の学識を培うと共に臨床医科学における知識を養う。他分野の基礎的知識の修得が必要となった場合を考慮し、4 年次まで履修可能となるように設定している。
- 3) 「臨床薬学コース」は臨床薬剤師の育成を最重要課題と位置付けるものであり、病院薬剤部等と連携し、医療現場での実践的な教育・研究を行う。学生は特論講義で博士課程の学生が身に付けるべき専門知識を修得しながら、病院薬剤部をベースに診療科病棟などで 1~2 年間薬剤師としてチーム医療を実践する。また、病院薬剤部並びに医局において特定の症例に関する臨床薬学的な研究および臨床と基礎の橋渡しとなるトランスレーショナル研究を所属分野と共同で実施することにより、臨床薬学研究能力を養う。
- 4) 「基礎薬学コース」は原則として分野内で課題研究を進めるものであり、様々な薬学領域において高度の専門的な学識並びに研究能力を有した国際的に貢献できる人材の育成を目的とするものであり、各分野での課題研究を通じて、高度な問題発見・解決能力および研究力を身につける。
- 5) 課題研究は、創薬科学系、分析薬科学系、生命薬科学系、病態薬科学系、医療薬科学系および臨床教育研究センターに属する計 17 分野による研究指導体制を整えているが、学生の希望を尊重し分野毎に受け入れる。「臨床薬学コース」では連携先の医学部および病院薬剤部と十分に打ち合わせを行った上で、学生の研究課題を決定し、相互に綿密な連絡を取り合いながら進めて行く。「基礎薬学コース」では、原則として所属分野で課題研究を進める。また、薬科学専攻博士後期課程を担当する 5 分野とも、課題の円滑な遂行のために研究指導において協力し合う。
- 6) 「がん薬物療法を専門とする薬学研究者養成コース(がんプロコース)」では、他のコースと異なり、指定された特論科目(臨床腫瘍学、腫瘍細胞生物学、腫瘍薬剤学、創薬腫瘍科学、臨床医科学、医薬品評価科学)を必修化し、がんに関する基礎的知識およびがん薬物療法に関して深い知識を修得する。原則として 1~2 年間、連携大学病院薬剤部(京都大学医学部、滋賀医科大学および三重大学)において大学院・病院連携プログラムを受講し、薬学の専門性を基盤とした基礎研究と臨床研究の橋渡しとなるトランスレーショナル研究等を所属分野と共同で実施することにより、がんに関する臨床薬学研究能力を養う。
- 7) 分野内で課題研究についての報告・討論、英文雑誌の論文紹介、輪読会等を行うことにより、研究能力の育成、創薬マインドの養成、プレゼンテーション能力、討論能力および英語力の強化を行う。これらのセミナー、研究報告会については、薬学研究演習として必修化(4 単位)している。
- 8) 総合薬学セミナーは、原則 3 年次の夏季休暇中に全分野が合同で開催し、各自が作成した「総説」を基に発表と質疑応答を行う。総合薬学セミナー(必修 2 単位)を取り入れることにより、プレゼンテーション能力、討論能力および論文作成能力を向上

させる。

- 9) 英会話、英語によるプレゼンテーションおよび英論文作成に関する英語セミナーにより、国際コミュニケーション能力を身につける。

### 自己点検・評価

特論講義においては、専任教員が担当する講義以外に、学外から講師を招へいして「特別講義(公開)」を開講している。各研究領域の第一線で活躍されている講師陣から最新の知見を得ることは、学生にとって非常に重要であり、取り組みとしては評価できる。なお、過去3年間の特別講義の開講実績は次のとおりである。

#### 【2012年度】

##### ①医薬品評価科学特論

- ・薬剤師が行う臨床研究(1)

東京大学医学部附属病院薬剤部 教授・薬剤部長 鈴木 洋史 先生

- ・薬剤師が行う臨床研究(2)

熊本大学医学部附属病院薬剤部 教授・薬剤部長 齋藤 秀之 先生

##### ②細胞生物学特論

- ・RNAと染色体:ウイルス感染から探る生命現象

京都大学ウイルス研究所 教授 ヒトがんウイルス研究分野 朝長 啓造 先生

- ・プロテアソーム系を利用したC型肝炎ウイルスによる肝発がん

山梨大学大学院医学工学総合研究部 微生物学講座 教授 森石 恒司 先生

##### ③臨床医科学特論

- ・循環器領域のカテーテル治療および高度先進治療

京都府立医科大学循環器腎臓内科 講師 沢田 尚久 先生

- ・不整脈治療法:最近の動向

京都府立医科大学循環器腎臓内科 准教授 白山 武司 先生

#### 【2013年度】

##### ①代謝分析学特論

- ・無期分析化学の最先端

神戸女子大学 教授 吉川 豊 先生

##### ②腫瘍薬剤学特論

- ・がん薬剤業務にかかる最近の展開

三重大学医学部附属病院薬剤部 教授 奥田 真弘 先生

- ・個別化がん薬物療法の原理と実践

滋賀医科大学附属病院薬剤部 教授 寺田 智祐 先生

- ・抗がん剤のレギュラトリーサイエンス

独立行政法人 医薬品医療機器総合機構

新薬審査第五部 部長 河野 典厚 先生

##### ③創薬腫瘍科学特論

- ・ペプチドを基盤とする抗がん剤の創薬研究

東京薬科大学 教授 林 良雄 先生

- ・製薬企業・バイオベンチャーにおける抗がん剤の開発状況

京都大学大学院薬学研究科研究員 櫻井 満也 先生

【2014 年度】

①薬物治療学特論

- ・腸管神経系の制御機構と機能性消化管疾患  
大阪市立大学大学院医学研究科消化器内科学 教授 富永 和作 先生
- ・京都から胃がん・大腸がんを撲滅するために何が必要か？  
京都府立医科大学消化器内科 准教授 内藤 裕二 先生

②医薬品評価科学特論

- ・臨床開発における医薬品評価  
塩野義製薬株式会社臨床開発部 臨床薬理部門長 輪嶋 恵宏 先生
- ・薬剤師が行う臨床研究  
神戸市立医療センター中央市民病院・薬剤部副部長代行 北田 徳昭 先生
- ・医薬品承認申請と医薬品評価  
独立行政法人 医薬品医療機器総合機構  
薬物動態スペシャリスト 永井 尚美 先生

本課程での「臨床薬学コース」および「基礎薬学コース」の選択状況は、前者は 9 名、後者は 16 名である。

総合薬学セミナーを全分野合同(これまでは「専門領域に基づく科学系ごと」の開催)で開催し、異なる研究領域をも含めた教員・学生の前でプレゼンテーションおよび討論を体験することで、参加大学院生のプレゼンテーション能力および討論能力の向上が認められたことは、大学院教育として評価できる。

研究教育の一環として研究倫理に関するスモールグループディスカッションを実施することで、大学院生の研究倫理に関する意識が向上したことは、いま求められている研究倫理教育への取り組みとして評価できる。若手研究者も交えての英語セミナーを実施し、大学院生も英語によって質疑を行う機会を設けたことは、英語教育への取り組みとして評価できる。

若手教員とがんプロコース共催によりがんに関する学内勉強会を行ったことは、コース履修学生の専門知識を大いに広げるものであり、がんプロコースの取り組みとして評価できる。

- ・ 別途シラバス及び教育課程等の概要(別紙様式第2号)を添付すること。
- ・ 履修モデルを添付すること。

○ 全学生の研究テーマ

◆大学院薬学研究科薬学専攻博士課程学生の研究テーマ一覧

【1年次生】

- ・D14001 内海 大知: DSS誘起大腸炎におけるセロトニン/5-HT<sub>3</sub>受容体の関与
- ・D14002 小川 慶子: 伝承薬物を素材とした生体機能性成分の開拓
- ・D14003 勝部 友理恵: 特殊病態下における薬物間相互作用の個人差に関する研究
- ・D13003 木村 嘉彦: 心不全患者の予後効果に対する薬学的指導の有用性に関する検討
- ・D14004 小出 博義: 分子標的薬の併用による薬物間相互作用の探索とメカニズム解明
- ・D14005 寺澤 美智代: 薬剤師による薬物治療時の副作用の予防と治療対策に関する研究

- ・D14006 西口 貴之:糖尿病を治療する亜鉛錯体の配位原子置換による構造活性相関研究
- ・D14007 古田 能裕:P2X7受容体の機能的発現制御機構の解明に関する研究
- ・D14008 山下 修吾:骨ターゲティング型キャリアーを用いた抗癌剤の骨移行性の改善
- ・D13008 中尾 元紀:キノロン系薬の抗緑膿菌活性における活性酸素の役割
- ・D14009 Li Xinpeng:各種シクロデキストリンを用いたクルクミンの消化管吸収性の改善

#### 【2年次生】

- ・D13001 太田 智絵:天然薬物由来配糖体成分の化学構造と機能解明
- ・D13002 川上 遥:がん指向性脂質ナノエマルジョンの開発における<sup>19</sup>F-NMRの応用
- ・D13004 中矢 有華:脂肪酸修飾を用いたアレンドロネートの消化管吸収性の改善
- ・D13005 松村 健吾:未知の細胞死機構に関連する新規分子C7orf24に関する研究
- ・D13006 山本 涼子:高感度分析に用いるポリジアセチレンリポソーム型発光素子の開発
- ・D13007 吉田 拓弥:慢性腎臓病と高尿酸血症の相乗作用に関する薬物動態学的研究

#### 【3年次生】

- ・D12001 大石 晃弘:抗がん剤投与に起因する味覚障害発症機構の解明に関する研究
- ・D12002 木村 峻輔:薬物の消化管吸収に及ぼす薬物分子の分散状態の影響
- ・D12003 四方 基嗣:宿主上皮細胞層における緑膿菌の透過機構の研究
- ・D12005 高田 哲也:がん幹細胞に発現するイオン輸送体を標的とした新規治療開発
- ・D12006 地寄 悠吾:臨床薬物治療における医薬品評価のための数理モデル解析
- ・D12008 戸田 侑紀:エクソソームのがん細胞指向性解析に基づく薬物送達法の開発
- ・D12009 松本 崇宏:タイ伝承薬物を素材として用いた生体機能性成分の探索研究
- ・D12010 村田 裕基:アスペラジライド類の合成研究

- ・一学生あたり30字以内で記載すること。

#### ○ 医療機関・薬局等関連施設と連携した教育・研究内容

本大学院では臨床薬剤師の育成を最重要課題と位置付けており、“臨床薬学コース”を選択した学生は滋賀医科大学医学部附属病院、京都府立医科大学病院および近隣の中核病院(洛和会音羽病院、滋賀県成人病センター)と連携し、医療現場での実践的な教育・研究を行う。学生は特論講義で博士課程の学生が身に付けるべき専門知識を修得した後、医療従事者(薬剤師)として病院薬剤部をベースに診療科病棟などで1~2年間、チーム医療を実践する。また、病院薬剤部や医局において特定の症例に関する臨床薬学的な課題について、特に臨床と基礎の橋渡しとなるトランスレーショナル研究も含め、所属分野との共同で研究する。

また、2012年度には、京都大学、滋賀医科大学、三重大学および大阪医科大学と連携した大学改革推進事業(がんプロフェッショナル養成基盤推進プラン:文部科学省)に採択されたことから、本課程に「がん薬物療法を専門とする薬学研究者養成コ

コース(がんプロコース)」を設置することとした。本コースは、他のコースとは異なり、学生は指定された特論講義科目(臨床腫瘍学、腫瘍細胞生物学、腫瘍薬剤学、創薬腫瘍科学、臨床医科学、医薬品評価科学)を必修化し、がんに関する基礎的知識およびがん薬物療法に関する深い知識を修得し、原則として1~2年間、提携大学病院薬剤部において大学院・病院連携プログラムを受講し、薬学の専門性を基盤とした基礎研究と臨床研究の橋渡しとなるトランスレーショナル研究等を所属分野と共同で実施することにより、がんに関する臨床薬学研究能力を養う。臨床薬学コースも含めて、臨床での研修は単位化され、専門薬剤師の資格取得の際にも活かされる。

さらに、医療機関ではないが、現在では、独立行政法人医薬品医療機器総合機構(PMDA)との連携大学院が発足し、レギュラトリーサイエンスを中心に特論講義で関連分野の基礎知識を修得した学生が原則1年間、PMDAに修学職員として出向し、PMDAの指導により実務研修ならびに課題研究を行う体制を構築した。

臨床薬学コース、がんプロコース、および連携大学院における教育カリキュラムは外部施設に依存するものであるが、これらの教育カリキュラムの実施は、学生の所属分野との共同で行われる。

#### 自己点検・評価

臨床薬学コースは、履修生が滋賀医科大学等の提携医療機関薬剤部に1年程度在籍し、医療現場における実践的な教育を受けるとともに、学部における実務実習とは異なり、自ら臨床薬学的な課題を見つけ、研究課題として取り組むことで、トランスレーショナル研究を実践しファーマシスト・サイエンティストとしての素養を涵養する体制として評価できる。さらに、がんプロコースおよび連携大学院における教育カリキュラムは、大学院生のニーズに応じた医療教育プログラムとなっており、医療現場でリーダーとなるべき人材の育成に貢献している点は評価できる。

- ・他職種との連携も含む。
- ・研究科又は専攻全体の教育研究活動と関連づけて具体的に記載すること。

#### ○ 学位審査体制・修了要件

学位論文審査体制は、大学院学則、学位規程および学位規程施行細則に定めている。論文の審査は研究科教授会で選出した3名以上(主査1名・副査2名以上)で構成する審査委員会で行う。審査委員は、研究科教授の中から定めるが、研究科教授会が必要と認めた時は、准教授に委嘱することができる。また、他の大学院または研究所等の教員等を審査委員に委嘱することも可能である。審査委員会は論文の審査および最終試験を行う。予備審査として、基礎となる報文が、厳正な査読のある英文専門誌に1報以上、筆頭著者として発表されていることが要求される。最終試験は口述による学位論文内容の発表および論文ならびに関連科目に関する試問である。口述による発表および試問は公開とし、口述発表時間は25分、試問時間は質疑を含めて15分とする。また、昨今の学位論文不正作成を未然に防ぐため、主査によるコンピュータソフトを使った原稿剽窃の確認制度を導入している。主査は副査と協議の上、審査要旨を作成して研究科教授会に報告し、研究科教授会は、報告に基づき審議を行い、学位を授与するか否かを議決する。議決をするには研究科教授全員の3分の2以上が出席し、かつ、出席委員の3分の2以上の賛成がなければならない。論文審査については、このように厳格性、透明性を確保できるような体制としている。

### 自己点検・評価

薬学専攻博士課程における教育と研究は講義、演習、薬学総合セミナーおよび課題研究(計 32 単位)により構成され、提出された学位論文の審査は上記の教育により修得した総合力を判定するものである。このような学位の授与方針・基準は適切であると評価できる。

博士課程の学位論文の申請基準は、基礎となる報文が、英文学術誌に 1 報以上(筆頭著者が条件)、既に掲載(印刷中の論文も認められる)されていることが条件となっている。本課程では、まだ学位授与の実績はないが、旧薬学専攻の事例から判断しても妥当と考えられる。

### ○ 修了者の進路の基本的な考え方(※新規事項)

本学大学院博士課程修了者の進路として、臨床薬剤師、企業研究者、国家公務員、薬事関係業務、大学教員を想定している。臨床薬剤師においては、特に「博士学位を有する臨床薬剤師」の重要性に着目し、現場のリーダーとして6年制学部卒の薬剤師を指導する立場になり得る人材としての進路を想定している。企業研究者においては、本学で培った研究能力によりグローバルに活躍できる人材として、国家公務員においては、特に中央省庁で薬事行政の中核を担える人材としての進路を想定している。薬事関係業務においては、レギュラトリーサイエンスの発展に寄与できる人材として、また、大学教員においては全国の6年制薬学系大学の将来を託せる人材としての進路を想定している。大学院学生には、これらの進路を具体的に示すとともに、大学院指導教員および進路支援課が協力して、常に学生からの相談に対応している。本学大学院修了者は、いずれの進路を選んだ場合においても、リーダーとして活躍できる人材となれることを第一に考えて指導を行っている。

・修了者の進路について大学がどのように考えているか、あるいは進路の開拓についての大学の基本的な考え方等を記載すること。